

論文内容の要旨

(別紙1-1)

氏名	久保田美佳
論文題目	A Cognitive Linguistic Analysis of Visual Perception Verbs in Natural Language —With Special Reference to English Verbs “Look” and “See”—
要 旨	
<p>本論文は、認知言語学の枠組みに基づき、英語の知覚に関わる述語の中核をなす視覚動詞 (look と see) の多義性と、メタファー、メトニミー、等の認知プロセスに基づく視覚動詞の意味拡張のメカニズムの解明を試みた実証的研究である。本研究は以上の考察を通して、これまでの言語学の意味研究の分野において提唱された多義性に関する意味分析を批判的に考察し、プロトタイプ理論と概念メタファー理論に基づく多義性の拡張ネットワークに基づく新たな意味モデルを提唱している。</p> <p>第1章では、本論文の理論的位置づけ、研究の目的と展望が述べられている。第2章では、本研究の分析の背景となる認知言語学の意味論 (特に、認知意味論) の理論的枠組みと先行研究についての批判的な考察がなされている。特に本章では、これまでの意味研究における多義性の分析 (特に、古典的カテゴリー理論に基づく多義性の分析) の批判的な検討がなされる。古典的カテゴリー理論の意味分析では、語彙の意味が多義的な場合、個々の意味の間にはプロトタイプ的な意味と言語主体の主観的な認知プロセスを介して拡張された意味の区分はなされていない。また、この伝統的な意味分析では、語彙の意味は、必要十分条件によって過不足なく定義が可能であるという前提に立っている。これに対し、本章では、個々の意味の間にはプロトタイプ的な意味と拡張された派生的意味が存在する事実を指摘し、古典的カテゴリー理論に代わる意味分析として、多義性の拡張ネットワークに基づく新たな意味分析の枠組みを提唱している。さらに、本章では、この新たな意味分析による視覚動詞の分析への適用の可能性を論じている。</p> <p>第3章では、認知言語学の意味モデル (特に、プロトタイプ理論と概念メタファー理論) に基づき、英語の視覚動詞の look を基本的に特徴づける知覚の意味の多義性を体系的に分析している。本章では、特に前置詞と共起しない独立用法の look の基本的な意味 (e.g. 視力の活性化、視線の移動、注意の活性化/移動に関わる意味) を、英語コーパスの広範な事例に基づいて分析している。例えば、look を伴う次の文 (e.g. Look! There is a mountain!) では視覚が顕在化するが、次の例 (e.g. Look. I think I've had enough.) の場合、より顕在化するのは視覚ではなく注意である。前者は、実際に視覚で捉えた対象の存在を伝え、その方向を見るように促す働きがあり、後者の場合には、注意の活性化が中心となり、視力の活性化や視線の移動の認知プロセスは背景化される。また、同一の文にこの視覚動詞が生起する場合であっても、知覚対象の違いにより視力の活性化、視線の移動、注意の活性化/移動、等の認知プロセスの顕在化 (ないしは背景化) は変化する。例えば次の例 (e.g. If you look carefully, you should be able to figure out that the picture represents the face of a man.) では、問題の知覚対象が相対的に大きい場合は視力の活性化だけではなく視線の移動と注目の活性化/移動を伴うが、知覚対象が相対的に小さい場合は、視力の活性化は前景化するが、視線や注目の移動スパンは狭くな</p>	

り、視覚動詞 look の意味もそれに応じて相対的にシフトする。本章では、以上の例に見られるような視覚動詞の意味のシフト (ないしは意味のゆらぎ) に関する事実を、英語コーパスの広範な事例に基づいて分析している。

第4章では、前置詞を伴う look の意味の多義性の考察を試みている。特に本章の前半では、前置詞の at を伴う look の字義通りの視覚的な意味の認知的分析を試みている。この分析を通して次の事実を明らかにしている。即ち、at を伴う look の場合には、look の意味の中核に関わる視力の活性化、視線の移動、注目の活性化/移動は、問題の知覚対象や文脈によって意味がシフトし、多義性に関しゆらぎが生じ、このゆらぎが look と共起している前置詞の意味にも影響する事実を明らかにしている。

さらに4章の後半では、前置詞の at を伴う look の意味の比喩的な意味拡張の問題を考察している。この種の知覚動詞の意味に関する事実で特に注目すべき点は、一見したところ字義通りの知覚を意味するようにみえるこの動詞の意味が、人間の思考、判断に関わる抽象的で主観的な意味 (e.g. <調べる>、<吟味する>、<調査する>、<検討する>、等) に拡張されている点にある。従来の伝統的な意味論の研究では、この種の拡張された意味は、問題の動詞の意味を特徴づける個々に独立した意味としてリストするとどまっている。これに対し、本章では、この種の拡張された意味は、メタファーの認知プロセスに基づいて、視覚に関わる根源的 (ないしはプロトタイプの) 意味から放射状カテゴリーの拡張リンクを介し、ゆらぎながら派生する創発的な意味として相対的に規定されている。本章の後半では、さらに他の前置詞や副詞を伴う look の複合表現 (e.g. look about, look around, look into, look forward, 等) の視覚的な意味から抽象的、主観的な意味への意味拡張のプロセスを綿密に分析し、基本的な意味と拡張的な意味の相互関係を、放射状カテゴリーの意味ネットワークモデルに基づいて体系的に規定している。

第5章の考察は、英語のもう一つの重要な視覚動詞である see の多義性の問題と、この種の視覚動詞の内在的アスペクト (始動相、継続相、終止相、等) に基づく概念構造の解明に向けられている。本章の前半では、前章までの視覚動詞の look の多義性との関連で、視覚動詞 see の基本的意味から抽象的意味 (e.g. <理解する>、<予測する>、<推測する>、<見なす>、<経験する>、等) への拡張のプロセスを、多義的な意味のグレイディエンス (gradience) のスケールに基づいて規定している。さらに本章では、動詞の概念構造の基本を特徴づける内在的アスペクトとの関連で、英語の自動詞と他動詞の分類体系における視覚動詞の位置づけを試みている。

従来の動詞分類では、英語動詞の体系は、活動動詞 (activity verb)、状態動詞 (state verb)、瞬時動詞 (achievement verb)、達成動詞 (accomplishment verb) の4種類の基本カテゴリーに区分されている。しかしこれまでの研究では、この種の動詞分類の研究においては、本論文が考察の対象とする視覚動詞の位置づけに関する考察は厳密にはなされていない。これまでの研究では、例えば英語の see は、一般的に状態動詞ないしは知覚行為の動詞として分類されている。これに対し本研究では、この視覚動詞は、実際の使用文脈によってその内在アスペクトの意味に関し、状態性、継続性、瞬時性、等に関し意味のゆらぎが生じる事実を、広範な作例とコーパスに基づいて明らかにしている。see が状態動詞であるのなら始点 (inception) も終点 (endpoint) も存在しないはずであるが、see には目に入るプロセスに関する始点関わっている。またこの動詞には、対象に視線や注意を向ける知覚プロセスが関わっているが、必ずしも対象の見極めは含意していない。また同じ see であっても、文脈により (e.g. I saw John in the street today.)、日本語の「見かける」に近い意味に解釈され、知覚行為の継続性が限定されている。

また、事例によっては (e.g. I saw him as soon as I entered the room.)、目に入った瞬間の知覚行為に関わり、継続性がさらに限定されている。また、seeは通常の物理的な行為に代表されるような活動動詞とは異なり、問題の活動を意図的に、反復的に継続できる行為ではない。本章では、動詞の内面的なアスペクト性を認定する時間表現の副詞句と視覚動詞の共起性に関する統語テストに基づき、英語の動詞分類における視覚動詞の文法カテゴリーの独自性を明らかにしている。また、以上の視覚動詞のアスペクトの意味的なゆらぎに関する事実に基づき、既述の伝統的な4系列 (i. e. 活動性、状態性、瞬時性、達成性の4系列) を前提とする動詞カテゴリーのタクソノミーの本質的な問題を明らかにしている。

前章では、視覚動詞 see の基本的な意味から抽象的な意味への拡張とこの種の意味と内面的なアスペクトの問題を考察している。ただし、前章で考察の対象とした意味拡張は、主に人間の思考、判断の知的側面 (特に、理解、予測、推測、等の思考プロセスに関わる知的側面) の意味拡張の考察が中心となっている。これに対し第6章では、seeの知覚に関わる基本的な意味からより主観的な意味への拡張の諸相を、lookの主観的な意味への拡張との関連で考察している。本章では、この比較の一例として、〈解釈する〉、〈読む〉、〈鑑賞する〉のような主観的な意味が関わるseeとlookの意味分析を試みている。その結果、前者の場合 (e.g. see the data) ではデータの内容の把握からさらに進んだ解釈がされる傾向があるのに対し、後者の場合 (e.g. look at the data) には、データの内容自体を把握するという意味が顕在化している事実を明らかにしている。さらに、look atとseeを比較した場合、後者は〈発見する〉に近い意味でも用いられるが、視覚的な知覚の意味とより主観的な判断が反映される意味が共存している事実を明らかにしている。

また英語のseeには〈理解する〉の意味としての用法が存在するが、この視覚動詞の意味をより綿密に検証するために、視覚動詞seeとこの動詞の主観的な思考・判断、等の意味に関係する動詞 (e.g. understand、find out、know) の意味を、目的語の位置に疑問詞を伴う [see + <interrogative>] と [understand/find out/know + <interrogative>] の構文フレームにおいて分析している。本章では以上の分析に基づき、疑問詞で問われる内容がより抽象的になるに従いseeの意味がfind outからunderstandの意味へと移行し、またseeとknowに関しては、主体の主観性が後者の認識動詞では背景化されるのに対し、前者の視覚動詞seeでは顕在化され、主体が受けた印象や主体による判断の解釈がより強まるという意味事実を明らかにしている。

最終章 (第7章) では、理論・実証の双方の観点から見た本研究の意義と日常言語の視覚表現の意味研究に関する今後の研究の一般的展望に関する考察がなされている。

論文審査の結果の要旨

(別紙2-1)

氏名	久保田美佳
論文題目	A Cognitive Linguistic Analysis of Visual Perception Verbs in Natural Language —With Special Reference to English Verbs “Look” and “See”—
要 旨	
<p>視覚表現の研究は、日常言語に反映される知のメカニズムの解明のための基礎研究として重要な役割を担う。本論文は、認知言語学の意味論の枠組み (i. e. 認知意味論) に基づき、英語の視覚動詞 (特に、lookと seeを中心とする視覚動詞) の多義性と意味の創造的な拡張のメカニズムの解明を試みた実証的研究である。</p> <p>本学位論文は、従来の研究に対し特に次の点で独創性が認められる。本研究では、認知言語学のプロトタイプ理論、概念メタファー理論、イメージスキーマ・モデルに基づき、視覚動詞の基本的な意味から、思考・推論・判断、等の抽象的な意味に比喩的に拡張される具体的な認知プロセスを綿密に分析し、視覚動詞の創造的な意味拡張のメカニズムを明らかにしている。これまでの言語学の研究では、感覚的な経験が思考、推論、判断、等の抽象的な意味に関係している点は指摘されているが、知覚を特徴づける五感のどの感覚モダリティが、この種の抽象的な意味への拡張を動機づけているかは明らかにされていない。本研究の視覚動詞の意味拡張に関する認知的分析は、言語のメカニズムと以上の人間の思考のメカニズムの相互関係を明らかにしていくための基礎的な研究として重要な意味を持つ。</p> <p>従来の視覚表現に関する研究では、語彙の字義通りの基本的意味とメタファー、メトニミー、等の認知プロセスを介して拡張される抽象的な意味は、離散的な意味としてカテゴリカルに区分されるにとどまり、これらの意味相互の分布関係は明らかにされていない。これに対し、本研究では、字義通りの意味と拡張された抽象的な意味は離散的には区分されず、この種の意味の世界には、非離散的な意味のゆらぎが存在する事実を明らかにしている点に独創性が認められる。以上の事実の解明は、従来離散的な意味素性の意味規定を前提とする古典的カテゴリーの意味理論の本質的な限界を示している点で重要な意味を持つと言える。</p> <p>また本研究では、以上の事実の解明にとどまるだけでなく、視覚表現を特徴づける基本的な意味と拡張的な意味のゆらぎを、放射状カテゴリーに基づく拡張ネットワークのモデルによって規定している。この点で、本研究は、言語研究における形式的・明示的記述の妥当性の基準を満たす実証的な研究として高く評価できる。</p> <p>本研究では、言語発達における意味習得の研究は直接的にはなされていないが、この方面の基礎的な研究としても重要な意味を持つ。これまでの認知言語学における語彙の意味習得の代表的な理論としては、コンフレーション理論が注目されている。この理論は、幼児の語彙の意味習得の初期段階で未分化な状態にある意味が、基本的な意味から抽象的な意味の習得へと離散的に転移していくという仮説を前提としている。本論文で指摘された視覚動詞を特徴づける基本的な意味と抽象的な意味の共起性とゆらぎに関する事実は、言葉の意味習得において、コンフレーション理論の仮説に反し、ゆらぎに基づく意味の非-離散的な習得の可能性を示唆している。この可能性</p>	

の検証は、言語発達の今後の実験的な研究に待たなければならないが、本研究の以上の知見は、言語発達の研究に貢献する理論言語学からの知見として注目される。

本研究は、作例だけでなく大量の言語コーパスに基づいて、視覚動詞の多義性と意味の拡張のメカニズムの解明を試みている。本研究の言語コーパスに基づく分析は、認知言語学の言語分析の主流を成す用法基盤モデルのアプローチの実証的な研究として重要な意味を持つと言える。

本論文の研究成果は、理論言語学における意味論の研究 (特に、日常言語の多義性の研究、意味変化の研究、修辭的・創造的意味の研究、等) に貢献するだけでなく、語彙の意味の科学的分析に関わる辞書学や言語教育の研究 (特に、語彙と構文の意味分析に基づく教材開発の研究) にも重要な知見を提供する。また本論文は、認知言語学の枠組みに基づく実証的研究であり、言語教育の応用分野における研究ではないが、本論文で明らかにされた視覚動詞の意味のゲシュタルト性、メタファー性、主観性、等に関する研究成果は、日本語教育や外国語教育における語彙教育 (特に、動詞の意味に関する語彙教育) にも重要な知見を提供する。

本研究では、視覚動詞の多義性に関する通時的な変化の研究はなされていない。多義的な意味の拡張プロセスと通時的な意味変化の関係の解明は、今後の課題として残されるが、本論文の研究成果は、通時的な意味変化の研究のための基礎研究としても重要な役割を担う。

審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	山梨正明
副査	教授	澤田治美
副査	教授	益岡隆志

最終審査の結果の要旨

(別紙 3)

氏名	久保田美佳
試験科目	
判定	合格・不合格

要旨

学位申請者の研究成果を確認し、審査するため、博士論文を中心に口述試験を実施した(2017年1月23日)。

申請者は、本研究のための認知言語学の理論的枠組み(特に、認知意味論の基本的な枠組み)を十分に体得し、言語現象の分析に際し適切に適用している。また、本研究に関連する国内、国外の重要な論文、研究書、等の文献を精読し、その知見を本研究に適切に反映している。

申請者は上述の口述試験において、以上の学問的な知識と研究能力を背景に、論文内容に関する理論面、実証面の質問に関し、明確にかつ的確に答えることができた。本論文の一部は、比較言語文化の研究に関する学術誌(『比較文化研究』、117号、2015)に既に掲載され、学問的に高い評価を得ている。また本論文の他の一部は、認知言語学の代表的な論文集(『認知言語学論考』14号、2017)に掲載予定になっている。この点においても、本研究は、言語学の関連学会における学問的水準に達している。

申請者の外国語の試験については、英語により執筆された学位論文と日本語、英語、仏語の要約における高い表現力と理解力から判断し試験を免除した。

以上の諸点を総合し慎重に判断した結果、審査委員会は、本博士論文に対し全員一致で博士(言語文化)の学位授与を適格と認め、合格と判断した。

審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	山梨正明
副査	教授	澤田治美
副査	教授	益岡隆志